

# ぶれない頭と眼を養う「哲学的訓練」

## ——指針なき現代の一步先を読み解くための実践講座

佐藤 優

(聞き手＝小峯隆生・筑波大学非常勤講師)

※外交の最前線で培った対人術の要諦をまとめた書籍『人たらしの流儀』で、佐藤優さんの聞き手を務めた小峯隆生こと、私は、筑波大学で『コミネ語り』と称した講座を不定期でおこなっている。私の講座に、佐藤優さんをゲストスピーカーとして招き、始めたのが、このワークショップ。新しい世界観を身につけるべく、今月も、ともに学んでいこう。

第 14 回

### 現場主義という仮面を被った反知性主義の台頭

佐藤 前回までは、「日本人とキリスト教」というテーマで、バチカンの 200 年、300 年先を見据えた長期戦略を見てきました。

今度は視点を変えて、日本社会の現状から考えていきましょう。

昨今、学問や教養をいくら身につけたところで、実社会で活用できなければ意味がない、

と言われます。学術のエリートが必ずしも仕事のエリートではありません。言葉が乱暴になります。いわゆる「使えないヤツ」ということですね。そうした風潮が強まったせい。現場を大事にしようという「現場主義」の名のもとに、反知性主義が広がっています。確かに、勉強はできるけれど使えないヤツでは困りますが、行き過ぎた反知性主義の台頭には待ったをかけたいと、私は思うわけです。

——そうは言っても難しい数式が解けたり、難解な哲学書が理解できたりするよりも、多く人は社会の現場で「使えるヤツ」になりたいのではないのでしょうか。

**佐藤** 確かに、それは誰しもが思うことでしょう。

「学校秀才」が多かった民主党政権は、結局現場のことを理解しきれずに崩壊したといえます。そして、いまの安倍政権が誕生しました。前の政権と比べると、内閣の個々人の偏差値は低くなっています。偏差値は高くても、ほとんど何もできなかった民主党政権とは違います。

精神科医の斎藤環さんが言っているように、「気合と、アゲアゲのノリがあればなんとかなるべ」という「気合で動くヤンキー政治」なんですね。いまの社会は「ヤンキーの反逆」であって、反知性主義が現場主義という名目で表面化しているのです。

——身近な具体例はありますか？

佐藤 大学生を例にとってみましょうか。学生たちが就職活動の時に一番よく質問されるのはなんですか？

——えっと、学生時代にどんなことをしてきましたか、とかでしょうか？

佐藤 そうですね。そんな質問を学生たちにすることが多いでしょうね。

すると学生たちは、「〇〇でバイトして……」とか「××にボランティアに行き……」と、こんな回答ばかりなんです。

しかし、よく考えてみてください。学生の本分は勉強することです。にもかかわらず、実社会への入り口で、面接担当者からその本分についてはあまり聞かれない。まあ、面接担当者の方も学問について質問するからには、それなりの知識と教養が必要ですからね。一方、学生の側でも、学業については聞かれないのに、真面目に勉強なんてやっつけられない、と勉強をしなくなる。

そして、そうした学生が就職して、採用側になる。でも勉強していないから、入社面接に来た学生に勉強のことなど質問できないし、学生もまたバイトやボランティアといった「現場」でどれだけ役に立つかをアピールする。そんな悪循環に陥っています。こうしたところにも、反知性主義がはびこっているのです。

——いまビジネス書で『仕事に効く教養としての「世界史」』（祥伝社）、『教養としての経済学』（有斐閣）など、「教養」がキーワードとなった書籍が売れているのですが、教養の

ないことへの危機感を抱えたビジネスマンたちが、手を伸ばしているのかもしれないなど、納得の思いがしました。

**佐藤** 一時期、山川出版社からの『もういちど読む山川世界史』や『もういちど読む山川日本史』などもビジネスマンによく読まれていましたが、私はもう一步踏み込んで、『詳説日本史研究』『詳説世界史研究』（いずれも山川出版社）をお薦めしたいですね。

反知性主義の人々は、いざとなったら「えーいっ、問答無用！」と気合や主観的願望をもって、客観的情勢を変えようと、力で訴えてきます。そんなことがまかり通らないようにするためにも、学識は必要なのです。

## **一 神教は寛容ではない!?**

**佐藤** さて、キリスト教の話に戻ります。いきなりの質問ですが、キリスト教の聖地はどこでしょうか。

——エルサレムです。

**佐藤** そうですね。では、イスラム教や、ユダヤ教の聖地はどこですか？

——エルサレムです。いろんな宗教の聖地だから、あの地域は紛争が絶えないんですよね。

**佐藤** みなさんそう誤解しがちですが、実は違います。あの地域で紛争が起こるようになったのは、イスラエルが建国された第二次世界大戦以降なんです。それ以前に複数の宗教が並存できていたのは、それぞれの宗教を信じる人々が、みな心優しき人々であった、と言いたいわけでもありません。むしろ、それぞれに、自分の信じる神にしか関心がなかった……。他人に無関心であったことが、結果的に平和を維持してきたのです。

ところが、それぞれの宗教が帝国主義の政策と結びつくことで、お互いが非寛容な存在となっていきました。

——そうだったんですね。一神教の異教徒同士が同じ地域にいるから紛争が絶えないのだとばかり思っていました。

**佐藤** だからといって一神教は非寛容と、ひとくくりにして考えるはいけません。一神教のなかにも、他者に寛容なものもあれば、そうでないものもあるんです。反対に多神教であるにもかかわらず、非寛容なものもあります。オウム真理教は、もともとは仏教ですが、どうでしょうか。

——寛容ではなかったですね。

**佐藤** そうですよ。同じように、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教のなかにも過激な

人もいれば、穏健な人もいます。意外に思われるかもしれませんが、一神教は概ね、寛容なのです。

この点に関して、イスラム教は徹底しています。

仮に、講義に遅刻した学生がいたとしましょう。先生は遅刻の理由を問います。すると日本などでは、「電車が遅れました」など、学生は遅刻の理由を言います。

これがイスラム圏だったらどうなるかわかりますか？

——言い訳をしないとか？

佐藤 いいえ、イスラム圏では、学生は「アッラーが私を遅刻させたのです。だから先生、アッラーを恨まないでください」と言います。しかも学生は遅延した鉄道会社を責めたりしませんし、先生も学生を責めたりしません。つまり他人を責めないということです。それは、すべては神との関係で成り立っていると考えられているからなんですね。

## **イエスは神か？**

佐藤 キリスト教の信条の一つに、ニカイア信条というものがあります。

——ニカイア信条？？？

**佐藤** 古くからキリスト教では、イエス・キリストは神なのか、人なのかで論争がありました。

その論争を経て、325年に採択された原ニケア信条は、「神の子、主イエス・キリスト、すなわち、父の本姓より神のひとり子として生れ、神からの神、光からの光、まことの神からのまことの神、造られずして生まれ、父とホモウシオス（同質）である」というものでした。神とイエスは別だとする考え方に対し、イエスは神と同質であるとしたのです。

対して、「いや、ホモウシオスとは、ギリシャの言葉で、哲学用語でもあり、聖書にない言葉ではないか……」と反論が出ます。

それなら、ホモイウシオス（類同質性）と「イ」を一字入れてはどうか、と主張する人々が出てきました。

すると、今度は「いやいや、似ているでは、イエスは神と似ている、つまり神ではないということになってしまうではないか」と、またもや反発があり……、というような事情で激しい論争が続いたのです。

——たった一字で何ともややこしい。でも、一神教は概ね寛容であるなら、そこもお互いが寛容になることはできなかつたんですかね。

**佐藤** 同じ宗教のなかでも、近しいものというのは憎悪が大きくなるんですよ。宗教ではないですが、たとえば革マル派と中核派。もともとは革命的共産主義者同盟という同じ団体です。でも、互いがいがみ合う形になりました。いわば近親憎悪ですね。

キリスト教のなかで常にある傾向というのは、イエスを神様にというものです。ホモイウシオス（類同質性）だと、イエス・キリストは神よりは少しだけ低い地位にあるということになる。それでは、神と全く同質ではないので、イエス・キリストに人間を救う力はないことになる。

キリスト教において重要なのは、神は偉大なもので、われわれとは質的にまったく異なるけれども、われわれのような下品で罪深い人間たちのところに下りてきてくれたのだという点がポイントです。この下りてくる、すなわち神が肉の形を取る、*incarnation*、肉つてというのはラテン語で *caro*（カロ）ね。*incarnation* をするというところに、キリスト教の特徴が見られます。そのため私たちの友だちであって、下りてきてくれた肉に触れることで、神とつながれるという構造をとっています。

こうした構造は現代社会に生きる私たちの身の回りにもありますよ。

それは、A K B 48 です。

—— A K B ですか？？？

佐藤 濱野智史さんの『前田敦子はキリストを超えた』（ちくま新書）によくまとめられているのですが、いつでも会いに行けるあの劇場や、握手会の会場は“教会”なんです。ファンにとって、これまでアイドルとは、テレビや、映画といった画像や、雑誌等の誌面でしか見ることのできない遠い存在でした。

しかし、A K B 48 はアイドルでありながら、自分たちのもとに降りてきてくれたキリス



トなのです。握手会という、その近接性は救済の担保でもあります。会うことや、握手することで神の世界とつながれるのが A K B 48 の構造です。

ところが、前田敦子さんのような存在が出てきてしまうと、その存在が神格化されていき、遠い存在になっていきます。それがつづく A K B 48 自体の構造が壊れてしまいます。その構造を維持するために「卒業」という形になったのです。こうして守られた構造は、まさにキリスト教の構造と重ねあわせることができます。

〈つづく〉

### 今月の内容をより深く学ぶための本

『世界が土曜の夜の夢なら ヤンキーと精神分析』

斎藤環著（角川書店）

『ヤンキー化する日本』

斎藤環著（角川 ONE テーマ 21 新書）

『ふしぎなキリスト教』

橋爪大三郎／大澤真幸著（講談社現代新書）

『前田敦子はキリストを超えた：〈宗教〉としての AKB48』

濱野智史著（ちくま新書）